

度のときも作業に駆り出されたことがあった。零下三五度以上の野外作業はないと聞いていたが、そのような規則は我々には与えられなかった。食糧事情も粗悪なもので、大豆、高粱、粟、馬鈴薯などで、米など四年間の抑留期間中、口にすることもない。ましてや見たこともなかった。量的にも少なく、当然体がだるく力も出ない。このような状態にかかわらず、ノルマ達成のためソ連人からダワイ、ダワイと追いまくられた。石の運搬作業で、頭大のものをトラックの荷台に乗せるにもやつとだった。冬は地面が凍り、掘ることもできない。夏には鉄道線路工事などが多かった。線路わきの側溝工事など、幅一メートル五十センチ、深さ三メートルの溝掘り中、土砂崩れに遭遇、生き埋めになり犠牲になった戦友も大勢いた。その他、栄養失調で倒れた戦友も数知れない。このような戦友たちの名前や住所を覚えていないことが悔やまれる。ただ御冥福を祈るしかない。

このようにして私たちの青春は死を背負った苦難の連続であった。よくもあの悲惨な四年間の抑留生活を

生き抜いて来たものだと思うとぞっとする。また、国際法を無視した旧ソ連の仕打ちは忘れることができない。

終わりに、今なおシベリアの凍土の下に眠る万余の亡き戦友の御冥福を祈り 合掌。

惨めなる敗戦

滋賀県 島田 敏

私は、満州間島省琿春^{こんしゅん}県^{しゅんか}春化^{しゅんか}に駐屯した歩兵連隊に所属する軍医でした。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は突如として雪崩のごとく国境を突破して進撃してきました。

私たちは十里坪に転進応戦しました。ソ連軍の多数の戦車を持つ機動隊の戦力には対抗できず、多くの死傷者が出ました。

八月二十五日第三軍司令部からの連絡將校がやって来て、初めて全面降伏したことを知らされ、八月二十

七日武装解除を受け、金倉^{きんそう}の収容所に移送されたのでした。

九月十九日、千人単位の大隊に編制されて「ウラジオストツクから東京ダモイする」との甘言に乗せられて約十日間の行軍に出発しました。この行軍の間に、何人もの人が栄養失調と過労のために死亡されました。国境を越えてクラスキノに着き、そこからシベリア鉄道の貨車に乗せられて、どこへ行くとも知らされず北上して行きました。

ハバロフスクを過ぎ、コムソリモスクを経て、小さい駅フンガリーに停車しました。そこで約五百人が貨車からおろされ、ムリー地区一〇一収容所に到着したのでした。

それ以来、期限なしの長い抑留生活が始まったのでした。

伐採作業や製材作業にと、あの厳寒の土地で、監視兵に「ダワイ」「ダワイ」と追い立てられながら、空腹を抱えての強制労働に従事させられたのでした。

私は毎日、ソ連側の女医（保健婦程度の人）に追い

立てられて丸太小屋の各宿舍の巡視をやらされ、毎日窓縁を指でこすっては「なぜこんなに汚いのか」と、また、床板を普通に掃除するだけでなく、床板を小刀などで削ってきれいにするように、ヒステリックに叱りつけるのです。そのくせ、時々私物検査と称してソ連兵がやって来て、刃物類はもちろん、腕時計から万年筆などを取り上げていくのです。

当時私の仕事としては、毎朝作業に出る前に、特に体の調子の悪い者は女医立ち会いの上で問診程度の診察をして、病人と思われる者はできるだけ宿舍に寝させるか、雑用要員に残すようにしたのですが、少々悪いくらいでは女医が承知してくれないのです。時々は収容所の所長までが「サボタージュさせるのか」と言って叱りつけるのでした。

その上、ソ連側からは治療用薬物等は全然与えられず、衛生兵などが持つていたわずかばかりのアスピリン錠、健胃錠、あるいはクレオソート丸などを集めて大切に使いましたが、わずかの間に使い果たしました。

収容所の周囲には鉄条網が張り巡らされ、四隅には

高い櫓（監視塔）があり、銃を持った兵士が立哨していた。

ある日の早朝、監視兵が発した銃声が聞こえた。一人の兵隊が鉄条網のすぐそばで射殺されたのでした。彼は衛生上等兵で、おとなしい真面目な人で、私の下でいろいろと大変よく医務室関係のことをやってくれた人でした。そのころ彼は下痢ぎみだったのか、収容所の便所が満員のため我慢ができなくて、鉄条網の近くで用を足そうとしたのでした。ソ連の監視兵は逃亡を企てたものとみなして、注意のための威嚇射撃もなく、いきなり射殺したのである。

当方の吉田隊長はソ連側の所長に抗議をしたのですが、あまり問題にしなかったようです。

伐採作業、木材輸送、製材作業、貨車積みなどの重労働のため、過労の上に栄養失調が重なり、朝起きると既に冷たくなって帰らぬ人となっていた人たち、厳寒の中で思いがけない事故によって亡くなった人たちに、収容所に入った当初はこのような気の毒な人が何人かおりました。

春化の部隊には、私と共に四名の軍医がおりましたが、一人は終戦後、吉林省敦化の病院で亡くなっておられ、一人は行方不明のままです。

とにかく、東京ダモイを夢見ながら、厳寒の地シベリアで尊い生命を失われた人々のことを思うとき、せめて立派な慰霊碑を現地に建てていただくことが大変意味深いことと思います。

いまだシベリアの地に眠る人たちの霊安かれと祈るばかりです。

シベリア抑留記

茨城県 塚口 毅雄

私は、茨城県鹿島郡波崎町、漁師の長男として生まれ、勝浦実業学校を卒業し家事に従事しているさなか、昭和十九年三月、現役にて宇都宮四〇部隊に入隊しました。当時二十歳でした。四月、満州孫吳（そんぐ）一四部隊に回された。八月に部隊が移動し、残留として満州に残